

## ■ PCN だより

### PCN Volume 70, Number 4 の紹介

Psychiatry and Clinical Neurosciences, 70 (4) には, Regular Article が 4 本掲載されている. 国内からの論文は著者による日本語抄録を, 海外からの論文は PCN 編集委員会の監修による日本語抄録を紹介する.

#### (国内からの論文)

##### Regular Article

#### 1. Classifying eating-related problems among institutionalized people with dementia

S. Shinagawa\*, K. Honda, T. Kashibayashi, K. Shigenobu, K. Nakayama, and M. Ikeda

\*Department of Psychiatry, Jikei University School of Medicine, Tokyo

#### 入院・入所中の認知症患者の食行動の問題の分類

【目的】認知症患者には様々な食行動の問題が出現し, 介護者の大きな負担となる. 食行動の問題を適切に分類することは, その背景となる神経基盤を理解し, 問題に適切に対応し, 治療的介入を開発するために重要である. 本研究の目的は, 原因疾患を問わずに認知症高齢者における食行動の問題を分類し, その各々に影響を与える背景因子を明らかにすることである. 【方法】対象は入院・入所中の認知症と診断された 208 名の患者である. 患者を直接担当している看護師に対し患者の食行動の問題について包括的で構造的な調査を行い, 対処に困難を感じている 24 の食行動の問題の項目を抽出した. その 24 項目の頻度を求め, 因子分析を行った. さらにその後に各因子に影響を与えている背景因子を明らかにするために原因疾患, 年齢, 性別, BMI, 認知機能, 重症度, 神経精神症状などを独立変数としたロジスティック回帰分析を行った.

【結果】4 つの因子が得られた. 因子 1 は過食, 因子 2 は嚥下の問題, 因子 3 は食欲の減少, 第 4 因子は食物へのこだわりであった. 各因子は BMI, 認知機能, 重症度, 神経精神症状を含む異なる独立変数と関連して

いた. 【結論】本研究は, 原因疾患にかかわらず入院・入所中の認知症患者において食関連の問題は共通であり, 各因子は背景の神経基盤を把握するために考慮されるべきであると示唆している.

#### 2. Prospect of future housing and risk of psychological distress at 1 year after an earthquake disaster

N. Nakaya\*, T. Nakamura, N. Tsuchiya, A. Narita, I. Tsuji, A. Hozawa, and H. Tomita

\*Department of Preventive Medicine and Epidemiology, Tohoku Medical Megabank Organization, Tohoku University, Sendai, Japan

#### 震災 1 年後の将来の住宅の見通しと心理的苦痛リスク

【目的】2011 年の東日本大震災後, 多くの被災者が仮設住宅や近親者の家に住むことを余儀なくされた. そのため, 被災者の住環境の変化が健康に与える影響について注意深く評価してゆく必要がある. 本研究では震災 1 年後の将来の住宅の見通しと心理的苦痛リスクについて横断研究デザインにて検討した. 【方法】2012 年, 宮城県七ヶ浜町に居住する 20 歳以上の者に自記式質問票による調査を実施した. 宮城県七ヶ浜町は津波による甚大な被害を受けた自治体の 1 つである. 震災後の将来の住宅の見通しは回答により 4 つに分類した: 「現在のところに定住予定」「次の定住先の目的がたっている」「定住先を検討中である」「定住先の目的がたっていない». 心理的苦痛は Kessler 6 scale により評価し, 5 点以上/24 点満点を心理的苦痛ありとした. 統計解析は多重ロジスティック回帰分析により実施した. 【結果】本研究での解析対象者数は 3,614 人であった. 「現在のところに定住予定者」に比し, 「定住先を検討中である者」の心理的苦痛を有する者のオッズ比 (95% 信頼区間) は 2.1 (1.6~2.7,  $P < 0.01$ ) であり, 「定住先の目的がたっていない者」で 1.9 (1.4~2.5,  $P < 0.01$ ) であった. 【結論】本研究結果が

ら、震災1年後に「定住先を検討中である者」「定住先の目途がたっていない者」で高い心理的苦痛を有していることが示された。

#### (海外からの論文)

##### Regular Article

#### 1. Effect of subchronic administration of agomelatine on brain energy metabolism and oxidative stress parameters in rats

A. Haas de Mello\*, L. da Rosa Souza, A. C. M. Cereja, R. de Bona Schraiber, D. Florentino, M. M. Martins, F. Petronilho, J. Quevedo, and G. T. Rezin

\*Laboratory of Clinical and Experimental Pathophysiology, Postgraduate Program in Health Sciences, University of Southern Santa Catarina (UNISUL), Tubarão, Brazil

Agomelatine 亜慢性投与がラットの脳エネルギー代謝および酸化ストレスパラメータに及ぼす影響

【目的】本試験の目的は、ラット脳におけるエネルギー代謝、酸化ストレスマーカーおよび抗酸化防御に対する agomelatine の亜慢性投与による影響を調査することであった。【方法】ラットに agomelatine (10 mg/kg, 30 mg/kg, 50 mg/kg) または生理食塩水を14日間連日腹腔内投与した。前頭前皮質、小脳、海馬、線条体および後頭皮質について分析した。【結果】本試験の所見から、複合体Iは10 mg/kg 投与では、前頭前皮質、小脳および線条体で活性化され、後頭皮質で阻害され、30 mg/kg および 50 mg/kg 投与では分析対象としたすべての脳領域で阻害されることが明らかにされた。複合体IIは50 mg/kg 投与により後頭皮質で活性化された。複合体IVは10 mg/kg 投与では線条体および後頭皮質で阻害、30 mg/kg 投与では線条体で阻害され、50 mg/kg 投与では海馬で活性化された。クレアチンキナーゼ活性は10 mg/kg および 30 mg/kg 投与により線条体で阻害された。脂質過酸化およびタンパク質のカルボニル化レベルは agomelatine 投与後も変化しなかった。スーパーオキシドジスムターゼ活性は10 mg/kg 投与により線条体で増加し、カタラーゼ活性は10 mg/kg 投与では小脳で阻害され、30 mg/kg 投与では後頭皮質で増加した。【結論】本試験結果は、一部の抗うつ薬は脳エネルギー代謝お

よび酸化ストレスに影響する可能性があるという他の試験結果と一致し、ラット脳における agomelatine の生化学的パラメータに及ぼす影響についての知見を拡大するものである。

#### 2. Correlation between neurochemical metabolism and memory function in adolescent patients with depression : A multi-voxel $^1\text{H}$ magnetic resonance spectroscopy study

N. Mao\*, J. Fang, H. Xie, X. Liu, X. Jiang, G. Wang, M. Cui, B. Wang, and Q. Liu

\*Department of Radiology, Yantai Yuhuangding Hospital, Yantai, China

抑うつ状態の青年期患者における神経化学的代謝と記憶機能との相関関係 : マルチボクセル $^1\text{H}$  磁気共鳴分光試験

【目的】本試験では、マルチボクセル $^1\text{H}$  磁気共鳴分光法 ( $^1\text{H}$ -MRS) を用いて背外側前頭前野白質および前部帯状回灰白質の生化学的異常を検出し、抑うつ状態の青年における生化学変化と記憶機能との相関関係について検討した。【方法】本試験には、24例の抑うつ患者および23例の健常対照者を組み入れた。被験者の背外側前頭前野白質および前部帯状回灰白質におけるN-アセチルアスパラギン酸 (NAA)/クレアチン (Cr) 比およびコリン (Cho)/Cr 比を評価するためMRSを行った。記憶機能はウェクスラー記憶尺度スコアにより測定し、抑うつは臨床観察、問診およびハミルトンうつ病評価尺度スコアによって診断した。【結果】対照と比較し、抑うつ患者は左背外側前頭前野白質にNAA/Cr比およびCho/Cr比の有意な低下、および右背外側前頭前野白質にNAA/Cr比の有意な低下を示した ( $P<0.05$ )。両側の前部帯状回灰白質では2群間に生化学的差異は認められなかった。それにもかかわらず、抑うつ患者の記憶指数は対照よりも有意に低かった ( $P<0.05$ )。背外側前頭前野白質のNAA/Cr比は記憶指数との間に正の相関を示した (左  $P<0.01$ , 右  $P<0.05$ )。【結論】本試験の所見から、前頭前野白質における生化学異常は、青年期抑うつ病態生理に関係することが示唆された。特に、このような異常は疾患初期からすでに存在しており、両側の前頭葉前部白質におけるNAA/Cr比の低下は、記憶障害および関連する神経病理に関係するものと考えられる。